

かいきょうげ
開經偈

むじょうじんじんみみょうほう
無上甚深微妙法

ひやくせんまんごうなんそうごう
百千万劫難遭遇

がこんけんもんとくじゆじ
我今見聞得受持

がんげによらいしんじつぎ
願解如来・眞実・義

読み下しと傍訳

むじょうじんじんみみょうほう
無上甚深微妙の法は、

「この上のないたいへん深く妙なるみ佛の教えには、

〈訳〉

この上のないたいへん深く妙なるみ佛の教えには、計り知れないほどの長い年月を経たとしても巡り会うことは難しいことです。私は、まさに今、その教えを拝見し拝聴していただくことができました。願わくはみ佛がご体得された眞理をわが身にいただくことができますように。

ひやくせんまんごう
百千万劫にも遭い遇うこと難し。

「計り知れないほどの長い年月を経たとしても巡り会うことは難しいことです。」

わ、いまけんもん
我れ今見聞し受持することを得たり、

「私は、まさに今、その教えを拝見し拝聴していただくことができました。」

ねがわ、によらい、しんじつぎ
願くは如来の眞実義を解したてまつらん。

「願わくはみ佛がご体得された眞理をわが身にいただくことができますように。」

解説

この偈文は、恵心僧都源信作と伝えられる「読経用心」(『大日本佛教全書』二四卷三二八頁上)に見られますが、現在のところ、残念ながら出典が不明です。開経偈は、その偈文名からも分かりますように、いよいよ釈尊がお説きになった経典を拝読する前にお読みします。ですから、それ以前の部分を序分といって、身心を整える導入となる箇所といえましょう。そしてここから正宗分といって、勤行の肝要な部分といえます。この偈文を読む際は、その言葉の意味通り、経典に出会えたこと、ありがたさに感謝する心をもって、次に拝読する経典をしっかりと頂戴したいものです。この偈文は、各宗派に通じて用いられています。

劫

非常に長い時間のこと。古典的
一見解によれば四三億二千万年
ともいわれます。